

地震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究 －トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から－

阪本真由美・木村周平*・松多信尚**・松岡格***・矢守克也

* 京都大学東南アジア研究所

** 台湾大学地質科学系

*** 東京大学大学院総合文化研究科

要 旨

過去に発生した自然災害の被災の記憶を忘却させずにとどめるとともに、それにより得た教訓を将来の防災対策に活かすための取り組みが、近年、世界各国で進められている。その一方で、そこで扱われる被災の記憶とはどのような記憶であり、それが、どのように継承されているのか、各地域性を踏まえたうえでの分析はあまり行われていない。本研究は記憶に焦点を当て、過去10年に大きな地震災害を経験したトルコ、台湾、インドネシアという異なる地域の人々が、どのような被災の記憶をとどめようとしているのかを、現地調査に基づき把握し、その結果を比較検討するものである。

キーワード： 記憶、集合的記憶、地震、自然災害、博物館

1. はじめに

将来起こるかもしれない、地震、津波、地滑りなどの自然災害による被害を軽減するためのアプローチのひとつに、過去の被災の事実を忘却させずに記憶にとどめるとともに、それにより得た教訓を異なる世代や地域の人々へ継承する、というアプローチがある。

災害の記憶は従来、昔話などの形で自然発生的に継承されてきたが、近年、行政などが意図的にそれを収集・保存しようという動きがある。例えば、1995年の阪神・淡路大震災の後に建設された博物館である阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」では、博物館という「場」において、被災者個人の記憶を伝える資料の展示が行われている。これは、国及び地方自治体（兵庫県）が、意図的に個人レベルの記憶を集め、それに、社会的な意味づけを与え、広く多数の人に公開しているものである。ここで集められた個人の記憶は、広く複数の個人に集合的にもたらされている記憶という意味で、集合的記憶と呼ぶことができる（石田、2000）。

また、そのような集合的記憶においては、単に個

人の記憶が集められているだけでなく、収集や展示の方法、あるいは具体的な内容において、意識的あるいは無意識的な選択が行われていることが多くの先行研究において明らかにされている（阿部ら、1999）。

例えば、溝上は、多文化国家カナダのナショナル・アイデンティティが、国民の間で自然発生的に醸成されたものではなく、国家が意図的にそれを推進したことを、国民統合の「場」としての博物館・美術館の分析から示している（溝上、2003）。

また、日本の広島平和記念資料館は、博物館を「場」として、被爆した個人の悲しみや苦しみを伝える物を展示することにより、核兵器のない平和世界構築の必要性を伝えている。

以上のような議論に基づけば、どの過去を記憶するのかは、それぞれの社会の価値観や目的の影響を受けており、その継承には地域差があると考えられる。

そこで、本研究では、災害の記憶とその継承について、被災者個人が何を記憶しているのか、被災者個人の記憶が集合的記憶を形成するのか、もし、集合的記憶が形成されている場合は、その記憶は社会

においてどのように意味づけられているのかを、過去に大きな地震災害を経験した地域において現地調査に基づき把握し、結果を比較検討する。

なお、調査対象国としては、トルコ、台湾、インドネシアを選定した。トルコ、台湾は、1999年に発生した巨大地震の被災から10年を迎える。同じ時期に発生した災害から10年が経過し、何が人々の記憶として残っているのか、それが地域的な背景とどのように関わっているのかを捉えることとする。

2. 分析方法

2.1 個人の記憶

個人の記憶については、被災者の「語り」に着目することにした。ここでの「語り」は、回答者の自由な語りを重視するものである。災害においては、時間が一つの基軸となることから、時間の経過に従い「地震発生時」「避難生活」「災害復興」という時系列にて記憶を語ってもらった。

設定した質問項目は以下の通りである。

- [1]地震発生時の記憶。
- [2]避難生活の記憶。
- [3]復興過程の記憶。
- [4]災害の記憶（いつ、災害のことを思い出すか。災害の何を思い出すか。誰かと災害のことについて話したりするか。忘却しているとすればそれはいつ頃からか。）
- [5]記念式典などへの参加。

調査は、各国の被災地の中でも災害による人的・物的被害が大きかった地域において、10人以上に対し、それぞれ30分以上の聞き取り調査を行った。調査対象者は、スノーボール・サンプリングにより選定した。まず、数名のキーパーソンからインタビューを始め、その人を通し順にインタビューを行った。調査に際しては、ジェンダー、年齢、民族、教育、宗教、職業に配慮した。また、一般住民に加え、村長・町長のような立場の人にも聞き取りを行った。

2.2 集合的記憶

被災経験が各地域においてどのように継承されているのかを把握するため、カタチとして確認ができる表象（モノ）に着目することにした。また、記憶を継承するモノについては、それぞれ、その経緯、モノに関わったアクター（誰が）、その目的は何かを、できる限り調査した。具体的な調査事項は以下の通り。

- [1]博物館、記念碑などカタチあるもの。
- [2]記念行事。

[3]映像、書籍、雑誌など。

[4]公的史料。

2.3 現地調査概要

現地調査は、前述の質問項目に基づき実施した。トルコの調査は、木村周平が担当した。現地調査は、2008年8月25日～9月5日にかけて実施した。台湾の調査は、松多信尚と松岡格が担当した。現地調査は二回に分けて実施し、第一回目の調査は、2008年8月21日～26日にかけて、南投縣日月潭、台中縣東勢鎮で実施した。第二回目の調査は東勢鎮を中心に2008年12月27日～12月30日まで実施した。インドネシアの調査は、阪本真由美が担当した。現地調査は、2008年7月28日～8月6日にかけて実施した。

各地域の「語り」はすべて録音し、録音データに基づき個々のインタビューを原稿に起こした。調査結果を、質問項目ごとに整理したものを、第3章（トルコ）、第4章（台湾）、第5章（インドネシア）に記す。なお、各章は、調査担当者が執筆している。

3. トルコ

3.1 調査概要

調査は、1999年のコジャエリ地震の震源に近い、コジャエリ県ギョルジュク市を対象に実施した（Fig1）。ギョルジュク市は人口12万人程の小規模な都市である。1999年の地震で最も被害を受けたのは、市北側の湾に面した地区である。同地区は、震源断層に近く、地盤が良くなかったことから被害が拡大したと考えられる。被害は、鉄筋コンクリート造の中・高層アパートに集中した。一方、市南側は丘陵地帯になっており、建物はまばらだったが、地震後にその一部に復興住宅が建設されている。



Fig.1 Map of Turkey

(Source:http://tr.wikipedia.org/wiki/G%C3%B6lc%C3%Bck,_Kocaeli)

本調査においては、25 人の被災者に対してインタビューを行った。調査回答者は、男性 19 人、女性 6 人であった (Table 1)。

Table 1 The List of Interviewees in Turkey

No	Sex	age	brief information
T01	female	50	lost husband, daughter, right arms.
T02	male	50	City Government Office
T03	male	30	Phsyotherapist
T04	male	50	Phsyotherapist
T05	male	30	Lost both legs.
T06	male	30	City Government Office
T07	female	20	University Student
T08	male	40	Barbar working at city center
T09	male	40	Leader of Social Welfare Association
T10	female	30	City Government, Public Health
T11	male	60	retired teacher
T12	male	50	retired
T13	male	30	owner of small shop in relocated area
T14	male	20	working in factory
T15	male	60	retired
T16	male	40	working in teachers' residence
T17	female	30	working in teachers' residence
T18	female	30	working in teachers' residence
T19	male	50	retired, ex-electrical engineer of navy.
T20	male	10	boy. Rescued from debris
T21	female	10	student
T22	male	60	retired
T23	male	40	city government, city planning section
T24	male	60	mayor of relocated area
T25	male	60	retired teacher

(Source: Kimura, S.)

3.2 個人の記憶

(1) 地震発生時の記憶

語りの多くは、地震発生日の揺れる直前の話から始まった。その日がとても暑い日だったこと、また、地震に先立って「海で火の玉が出る」「魚が飛び跳ねる」などの前兆現象を見たというものもあった (T08, T12, T14)。

寝るや否や揺れが始まり (午前 3 時 2 分)、家から外に出た (T07)。揺れについては、「揺すられ、下から突き上げられた」 (T06) という語が多い。この他に揺れについては、様々な表現がみられた。「篩にかけられたようだった」 (T08)。「揺れに伴って唸るような大きな音を聞いた」 (T08, T12)。「釘が抜けるジーという音を聞いた」 (T09)。「ぐるぐる回り、激しく突き上げられ、ぐるぐる回り、突き上げられる、という感じ」 (T11)。なかには、閉じ込められ、しばらくして救出された人もいた (T20, T22)。

揺れが落ち着いた後、人びとは家を出た。周囲は混雑していた。「あたりは砂ぼこりで一杯だった。母を呼んだ。家ではガラスの食器が壊れたり、家具がひっくり返ったり」 (T16)。海沿いに住んでいた人は「外に出ると足元は水浸しだった。津波が起きたようだった」 (T14)。これは、おそらく液状化現象が起きたのではないかと推察される。

多くの人はその日は朝まで外で過ごし、知り合いの安否を確認したり (T07)、救助活動を手伝ったりし (T06)、その後避難していた。

(2) 避難生活の記憶

多くの人が、数日から数カ月の間は家に入ることができなかったと語った。また、避難の理由として湾の対岸にある石油コンビナートが爆発するという噂に言及していた (T07, T21)。避難の仕方としては、家の前にテントを張る (T16, K18)、親族の家を訪ねる (T07)、郷里に戻る (T08) と様々であった。また、支援については、すぐに支援物資が来たという人もいれば、支援が遅く水や食料が不足した (T16) という人もいた。また、軍の活躍に言及する人もいた (T04)。印象に残ったこととして、オランダや韓国、イスラエル、ギリシャ、日本など外国からの支援についての言及が多かった点が挙げられる (T10, T12, T14, T18)。

相対的に避難生活に関する語りは少なかった。テント生活の「苦しさ」 (T11) や「風呂、トイレがないなどの問題があった。家が壊れてしまった人は毛布もなかった」 (T17) 程度であった。テントやプレハブで生活する人々の要求に応じたり、人々を復興住宅に移したり、という苦労話を聞いた。

(3) 復興の記憶

仮設住宅 (プレハブ) での生活は「特に問題なかった」という人が多数であったが、よく聞いてみると「復興住宅に入居した当初は苦労した」という語りがいくつか聞けた。例えば、「初めは、復興住宅はよくなかった。雨漏りがしたり、水がたまったり」 (T22, T24)。また、「周囲の人々が顔見知りでなく、人間関係を築くのにかかった」 (T14) などである。

一方、特に行政関係者の間には、復興していく景観に励まされた人もいた。「15 か月ずっとテントで働き生活した。疲れはなかった。町が少しずつ回復していくのを見ていると疲れがいやされた」 (T09)。

(4) 災害の記憶

「昔の友情、近隣関係が失われてしまった」 (T04, T05, T24) という形で地震がもたらした決定的な変化

について語る人は多い。また、災害による精神的な苦痛を未だに多くの人が感じていた。「今でも苦しみや痛みは忘れられない」(T04)。「今でも精神的な影響が癒えず、薬を使っている人々がいる」(T03, T04)。「いまも、鼻の奥がツンとする感じが残っている」(T05)。

地震により貧富の格差が広がったという人もいた。「地震で金持ちは貧乏に、貧乏人は金持ちになった」(T01, T04)。

また、災害の原因あるいは今後の教訓として、建物の重要性を強調する話が複数みられた。「被害を受けた建物に今でも人が住んでいるが、次の地震で倒壊するのではないか、また、大きな被害が出るのではないかという不安がある」(T04, T09, T11)。「今でも建物に入る時は柱や梁が丈夫か確認する」(T05)。「教訓としては、一にも二にも教育。専門的なことはともかく、あらゆることについては基本的なことを知っていなければいけない。たとえば建設についても」(T09)。「問題は建物である」(T22)。

(5) 記念式典などへの参加

今回インタビューに応じた人の多くは、式典が行われていることは知っているけれども参加していないと語っていた。「意味がわからない」(T05)。「目的が違うと思うので。初めは参加したが、もう行っていない」(T10)。「単なるおしゃべりのような気がするから行かない」(T18)。彼らによれば、式典に参加するのは新しく引っ越してきた住民とのことであったが、次節にみるように、式典に参加する被災者も少なくない。

3.3 集合的記憶

(1) 博物館

地震から5周年となる2004年8月17日に、地震に関する記憶を集積し展示する「地震文化博物館」(Deprem Kültür Muzesi)が、コジャエリ県東隣に位置するサカリヤ県のアダパザル市に開館した。博物館開設は公共事業住宅省の発案であったが、その後アダパザル中央市役所が管理することになった。

博物館は、繁華街に近い市街地に建てられており交通の便は良い。建物は半地下になっており、市民の認知度も高い。入館料は無料で地震の記念日には24時間開館している。開館からの4年間でおよそ24万人の人々が訪れている。

この博物館の入口には「1999年8月17日のマルマラ地震で命を失った人々の思い出のために、この地震で体験されたものを理解させ、思い出させるという目的のために2001年に建設された」と書かれている。ここでは「理解させる(anlatmak)」と「思い

出させる(hatırlatmak)」という二つの言葉が使われている⁽¹⁾。深読みすれば、この「場」としての博物館の利用者には、記憶を「思い出させる」人、即ち、すでに地震について知っている人あるいは記憶している人、および「理解させる」人、即ち地震を知らない人、という二通りの人びとが想定されているとも考えられる。

博物館には、入口からぐると一周して入口に戻る一本の通路があり、普通に歩けばものの数分でたどれてしまうほどの広さである。館内は外観と同様、柱が傾けてあったり、壁に穴があいていたり、と被災家屋を模したデコボコとしたつくりをしている。展示物は通路に沿い壁面を利用し配置されている。同市助役の「地震の瞬間のことを伝えることに主眼を置いている。それにより地震に対して準備し、今後の災害での被害を軽減することを目的としている」という説明に基づき展示を区分するならば、①発災時の記録・記憶②防災教育③慰霊の3つに分けることができるだろう。

①の発災時の記録・記憶に関しては数多くの写真や新聞記事の入った額、地震の揺れの波線が描かれた地震計の記録紙がある。②の防災教育については、入口近くに、台所が再現されており、テーブル、机、棚が振動台上に置かれている。これ他、救助の様子を示すジオラマや、構造物についての小さな実験器具、地震計の模型が展示されている。③の慰霊については、展示の一番奥まったところにある、ガラスのキャンドル群がある。キャンドルはそれぞれ長さ10cm、直径4cmほどの円筒形をしており、それぞれに名前が書かれている。これは市内の1999年の地震の死者全員の名前を記したものであり、傍らの壁面のパネルには名簿の一覧がある。ここにはノートも置かれていて、来館者が自由に記入できるようになっている。キャンドルは、2007年に作られたこの博物館のなかでももっとも新しい展示物なのだが、そこに名前を記されているのはアダパザル市の死者だけであった。

この博物館は1999年の地震の犠牲者を悼むことに加え、その地震を知らない人々にも様々な側面から地震に関わるモノを示すことにより、地震を「理解させる」ものだといえよう。市では毎年3月の第1週を地震週間とし、小学生にこの博物館を見学させるようにしており、2008年には3670人の生徒がここを訪れたという。

(2) 記念式典

コジャエリ地震の記念式典は、地震が起きた翌年である2000年から毎年行われている。2008年現在まで継続していることを筆者が確認できたのは、コ

ジャエリ県キョルフエズ市、イズミット市、ギョルジュク市、およびサカリヤ県アダパザル市の4か所である。記念式典は出来事の記憶と関わるが、多くの場合、その式典と出来事との結びつきを「日付」や「場所」によって示す。記念式典が一つにまとまらず、複数の場所で行われ続けていることは、1999年の地震がいかに広範囲にわたって深刻な影響を与えたかを示しているといえよう。

この4つの式典のうち、筆者（木村）が参加した経験があるのは、前3者である。いずれも基本的な構成は似通っており、市長や招待者（商工会議所の会頭などのほか、地震学などの学者）による講演と、イマーム（礼拝の指導者）の先導によるクルアーン朗誦をおもな内容とし、8月16日の夕方から深夜にかけて行われ、地震が起きた時刻である8月17日の午前3時2分まで続く。多くの場合は、日付が変わる前に行事がいったん終了し、残った式典の運営者や有志などで3時2分にあわせて、海岸から海に花輪を投げ入れるなどの行為を行い終了となる。こうした式典の具体的な事例として、2008年のキョルフエズ市で行われた式典について少し詳しく見てみよう。

キョルフエズ市の式典は、住宅街のなかにある地震記念公園で開催された。この日の主催はやはり市役所であったが、実質的な運営は町内防災ボランティア（Mahalle Afet Gönüllüleri, MAG）というキョルフエズに支部のある防災NGOでの準備によるものであった。

式典は8月16日の夕方に始まった。会場付近には「(われわれは)8月17日を忘れない(unutmadık)忘れさせない(unutturmayacağız)」と書かれた横断幕が張られ、会場はトルコ国旗によって飾られていた。ここでも「忘れない」が繰り返されていることとともに、地震の日付である「8月17日」が記憶を指す名前として機能していることも見ることができる（木村, 2006）。

この式典において最初に行われたのは、MAGのメンバーたちによる行進であった。彼らは総勢30人ほどが、オレンジ色の救助隊のユニホームを着て「私の声が聞こえる人はいますか？MAGはここにいるぞ！声が聞こえたら返事しろ！できれば近くにある硬いものを叩け！」と大きな声で叫びながら、夕闇のなか、赤々と燃える松明を掲げて町を練り歩き公園に向かった。そして彼らの到着とともに、式典が開始された。

この「私の声が聞こえる人がいますか？（Sesimi duyan var mı?）」という掛け声、特にその後半部分は、地震直後におこなわれた救助活動において使われた、要救助者を探すときの掛け声である。瓦礫の下に閉

じ込められた人びとに対し、救助隊は「声が聞こえたら返事をしろ、返事ができない状態なら、外に聞こえるように音を出せ」と叫んだのである。その後、この言葉は、人々に防災活動に参加することを呼びかけるメッセージとなった。

こうみると、この救助隊による行進は1999年8月17日において行われたこと（救助）を反復しつつ、効果的に、組織立って救助を行う人びとの姿を示そうとしているのである。それが8月16日の夜、つまり「8月17日」の来る直前だということは示唆的である。

会場には数百人規模の近隣住民が訪れ、ちょっとしたお祭り騒ぎになっており、厳粛な雰囲気というより、行楽地を訪れる人々の姿に近かった。

行進をした人々が会場に到着して場が多少落ち着くと、マイクを持った司会が記念塔の前に現われ、まず、地震の犠牲者のための黙祷が行われた。次いで、国歌が斉唱されると、今度はイマームが演壇に招かれ、クルアーンの朗誦を行った。世俗主義国家トルコにおいて公的な行事においてイマームが出てくるのを目にすることはあまりないが、これは地震の死者の追悼のためのものであるということで、人びとは誰も奇異には思わないようだった。

つづいて講演になった。予定されていたのは5人だったが、10人ほどが話をした。話をしたのは、研究者（前カンディリ観測所兼地震研究所所長やイスタンブール大学の地震学者）、NGO関係者、そして行政関係者（キョルフエズ市長）である。いずれも冒頭で式典を運営する人びとと来場した住民に感謝したうえで、1999年から今までに防災に関してなされたことが不十分であることを訴え、対応をとるにを進めていくべきであることを主張した。その間、演壇の上に設置された大きなスクリーンでは、地震の直後の光景が映し出されていた。演壇の前には大量のプラスチック椅子が並べられており、多くの人々はそこに座ってじっと耳を傾けていたが、立って歩きまわるものも少なくなく、騒然とした状態で式が続いた。

11時すぎに式典はいったん終了し、来場者たちは帰宅し始めた。そのあとMAGのメンバーは会場を片付け、最後に3時を目指して有志とともに船で海に乗り出し、予定通り湾の対岸にあるギョルジュク市からの船と出会い、そこで花輪を海に投げ入れ終了した。

以上が記念式典の様子である。この地震に関しては、博物館や記念式典の他に、書籍や雑誌記事、さらには行政の報告書等が多数出版されている。ただし上記博物館を除き、災害に関する出版物が公的あるいは私的な組織によって収集・保存されていると

いう事実は確認できなかったため、そうした出版物の公刊・流通が本論文でいう「集合的記憶」と関わるかどうかについて現時点では明言できない。

4. 台湾

4.1 調査概要

1999 年 9 月 21 日午前 1 時 47 分、台湾中部集集付近を震源とするマグニチュード 7.6 (USGS による) の地震が発生した (以下、921 地震)。被害は南投県や台中県を中心に 2 市 5 縣に及び、最大震度は日本の震度 7 に相当する揺れを記録した。全壊家屋は 4 万戸以上、死者・行方不明者は行政院の発表で 2,378 人に達したが、発生時間が深夜であったため、地震の規模や発生場所の割には死亡者数が少なかった。歴史的に台湾は地震の多い地域であるが、1,000 人を超す犠牲者を出したのは 1935 年、100 人以上の犠牲者を出した 1941 年といずれも日本統治時代の地震であった。

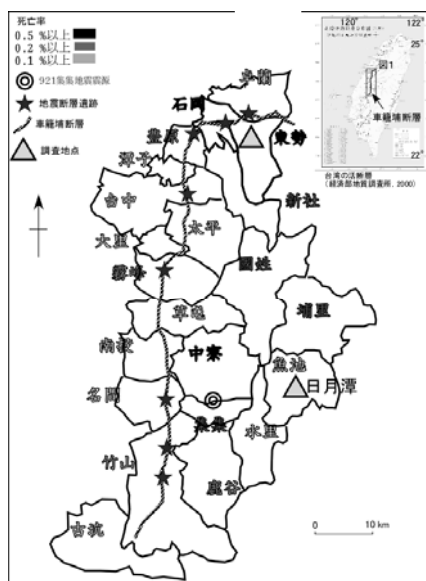


Fig.2 Map of Active Fault and survey area

(Source: Matta, N., and Nishikawa, Y., 2009)

現地調査は二回に分けて実施し、第一回調査は、8 月 21 日～26 日にかけて、南投縣日月潭、台中縣東勢鎮で実施した。第 2 回目の調査は東勢鎮を中心に 12 月 27 日～12 月 30 日まで実施した (Fig.2)。

日月潭とは湖の名称で、その周りに台湾原住民のうちサオ族が暮らす地方である。東勢鎮は、山脚に位置しており、客家の農村から発展してきた街であるが、この鎮だけで 357 人の死者を出しており、人口比率からみると最も被害が大きかった鎮である。

調査回答者数は、男性 23 名、女性 8 名であった。また、日月潭の調査回答者が 5 名、東勢の回答者が 26 名であった (Table 2)。

Table 2 The List of Interviewees in Taiwan

No	Sex	age	brief information
C01	male	60s	edit village history
C02	male	50s	ex-village leader(earthquake time)
C03	male	50s	Sao reconstruction movement leader
C04	female	30s	assist recovery and continue to live
C05	male	70s	senior leader of Sao
C06	male	40s	young leader
C07	male	40s	3 month in tent.
C08	male	60s	ex singer
C09	female	50s	wife of ex-singer
C10	male	40s	elementary school teacher
C11	male	40s	elementary school teacher
C12	male	20s	living near elementary school
C13	female	50s	cooking school lunch
C14	male	50s	elementary school teacher
C15	male	50s	agricultural goods shop
C16	male	50s	teacher of music instrument
C17	female	40s	sweet shop at old main street
C18	female	60s	meat food shop at old main street
C19	male	40s	fireman
C20	male	50s	fireman
C21	female	60s	living highest building. Evacuate WC.
C22	male	60s	fruits farmer
C23	male	50s	ex-fireman
C24	female	50s	ex-junior high school teacher
C25	male	40s	ex-social activity from Taipei
C26	male	60s	fireman
C27	male	30s	fireman, volunteer
C28	male	50s	ex-electric shop, apartment manager
C29	female	30s	wife of C29
C30	male	40s	travel company
C31	female	30s	elementary school teacher

(Source: Matta, N. and Matsuoka, T.)

4.2 個人の記憶

(1) 地震発生時の記憶

地震発生は深夜 2 時近くなので、大半が寝ていたようだが、人によって麻雀卓を囲んでいた (C21)、その片付けをしていた (C25)、旅行先から帰ったばかりで寝ていなかった人もいた。寝ていた人は、縦揺れがあったこと、最初は何が起こったか全くわからないような状態であり、台風だと思ったという人もいた。現地で旅行会社を経営している人は、「地震を経験した人々を大陸 (中国) に何度か連れて行って初めて、人々の潜在意識にひそむ地震恐怖症を発見した。寝台列車に乗ると眠れないのは、夜中に地震で飛び起きたことに関係しているからだ」と確信

するに至った」(C30)。

地震後の避難状況はさまざまであった。門がすぐ開き、すぐに外に飛び出した人もいれば、門が開きにくくなって外に出るまでに時間がかかった人もいた。また、東勢では、2 階以上の高層建築の 1 階部分が潰されるケースが多かった様子で、1 階に逃げる途中、あるいは、1 階から 2 階に逃げる途中で命を失った人がいた。東勢でも一番高級だといわれる 14 階建てのマンションが倒壊し、多くの被害を出したが、中には、トイレへと駆け込んで九死に一生を得た人もいた (C21)。このマンションに救出に入った消防隊員は、適当な電動工具が当時配備されていなかったため救出に苦労したと語った (C19)。土レンガの古い家も倒壊し、壁の下敷きになるというような被害を出した。

(2) 避難生活の記憶

大きな被害に見舞われなかった人も、自分の家の中で暮らすことができなかった。友人・親戚の家で過ごした人 (C18) もいたが、多くの人はテント生活を過ごしていた。地震前からアウト・レジャー用にテントを持っていた人もいれば、地震発生後すぐにまたま近くの商店でテントを売っていたのを買ったという人もいた。自家用車がある人は数日その中で過ごしていた。テント生活の長さは人によって異なり、数日という人から数ヶ月という人もいた。

テントを張る場所も人によってさまざまだったが、近くの空き地や、学校の校庭が使われた。概して家族ごとの行動が主であった。あえて他の家族 (核家族 + 祖父母) と一緒に行動した人に話を聞くと、「食糧を取りに行く際に連れ立って行った。洗濯の際に女性が連れ立って行った」(C29) との答えが返ってきた。

救援物資に関しては、大きな問題は起こらなかった。外から救援物資が届くまでは冷蔵庫の中身を出して食いつないでいた。配給上の不平等感などを感じる人もいるにはいたようだが、量的に足りていたためか不満などはみられず、「援助物資を浪費しすぎた」(C16) と語る人もいた。ただし、人命救助については課題がみられた。東勢は陸の孤島的な地政学的位置にあるためか、他の地域に比べて外界との連絡が遅れ、さらに、台湾の消防隊に救助に必要な電動工具などが配備されておらず救助が遅れた (C19)。

地震によりガス・電気・水道が止まったが、その対応も人により異なり、ガスをボンベ式で買っていた人は、残っている限りこれを使っていた。水道に関しても、山から水を引く、井戸から水を汲んでいた場合は大きく困ることはなかった。

(3) 復興の記憶

地震が起こったことにより、台湾中部に大きな関心が集まり、これは、サオ族の文化復興運動を後押しする力として働いた。日月潭のある村では、テント生活を送っていた時にサオ族の将来を話し合う会合が持たれ、外部からも学者や郷土史家も参加した (C3)。この時に話し合われたアイデアやこの機会によって構築された人脈が、後の民族運動の方向性 (民族認定・地名の改名・母語伝承など)・資金確保・運営形態・参加者を決めたようだ。

また、あるタイヤル族の村では、民族文化復興のために作られた村内の組織が地震当時の救難隊結成につながり、さらにそれが以後の災害救助や現在まで続くコミュニティ活動にまでつながるという例も見られた (C14)。

逆に、地震復興に関して苦労した人々もいる。例えば、タイヤル族のある村では、地方政府によるプレハブ住宅の建設が遅れ、家屋再建に必要なローンを組めないという問題に直面していた (C6)。

心理面で復興に関与した人もいる。地震当時中学校の教師をしていた女性は、心理学者による心理ケア・トレーニングを受けて、生徒の心理ケアに当たった (C24)。彼女はすでに学校を退職しているが、元生徒への心理ケアは現在も続けていると言う。

災害を機に、新たに外部の人が地域に入り復興に関わるようになっていく。例えば、日月潭の女性 (C4) は、地震前は日月潭とは何の関係もなかったが、地震の復興に関わったことを機に移住し、現在は、サオ族の文化復興運動に関わっている。石岡郷の男性 (C25) もまた地震発生前は石岡と関係のない社会運動団体の人物であったが、この社会運動団体の一員として地震の復興に関わったことがきっかけとなり石岡に住み着き、現地の客家文化復興やコミュニティ誌の発行に精力的に働いている。その試みの一つが「石岡客家劇団」である。これは、被災した女性により結成された劇団であり、初回公演は震災に関わるものであったが、その後も活動を継続しており、地域外でも公演を行っている。

(4) 災害の記憶

災害の記憶については、「いやなことは早く忘れた方がよい」あるいは「忘れるのが自然」という語りが複数みられた。台湾では、地震の記憶については一般に「悪い記憶は早く忘れた方がよい」という意見が共有されている。したがって地震に関することが、日常において語られることはほとんどない。特に家族を亡くした家庭では避けられていた。

また、自己の地震の経験を防災に生かそうという

ような考え方もみられなかった。一方で、防災訓練以外にも、災害の威力を異なる世代に伝えようという発想はみられた。

危機意識に関しては、多くの人は元の状態（921地震を経験する前）に戻っているような印象であった。教師や消防隊員といった職業の人は特に危機意識を持って対策を考えていたが、それ以外の人も「次に大きな地震が来たら、よりうまく対応できる」と考えている人も少なくなかった。また、東勢のように地理的条件が、被害状況・避難状況などに大きな影響を与えていた。

人々の間では「大きい地震」を、被害をもたらすものとしてカテゴリーし、「大きい地震」に注意するというような言い方がみられた。ただし、何ををもって「大きい地震」を区別しているのかについては、十分な見解が得られなかった。これは興味深い点であるので、今後の調査によってより深めていきたい。

4.3 集合的記憶

地震の地域の記憶については、さまざまな形態があるがここでは、(1) 博物館・地震遺跡博物館 (2) メディア報道について記す。

(1) 博物館・地震遺跡博物館

921 地震の特徴とでもいえるのが、博物館の充実である。ここでは、そのうちで中心的な 921 地震教育園区の概要と保存の経緯について詳細に論じる。この他にも、石岡ダム、豊原中正公園、台中市大坑地震公園、名間公園、沙東宮 921 地震記念公園、太平市の地震公園、南投市の 921 地震資料展示陳列室など地震を機に開設された博物館が多数ある。

地震博物館は国立が一館、省立が 1 館、計画中の県立が 1 館有り、他に国家公園が 3 箇所、多数地方自治体が整備した地震公園が存在する。国立の地震博物館は被害地域中部に位置する霧峰地区に車籠埔地震断層の直上に建設され、正式名称は「921 地震教育園區」という。この博物館には、小中学校の修学見学旅行や国内観光拠点だけではなく、外国団体の視察も多くあり、2005 年の開園以来 3 年間の入場者数は 150 万人を超える。

地震により破損した 4 棟の建物は補強され、参観通路から建物の中や上から観察できるようになっており、地震のすさまじさを肌で感じられるような工夫が随所になされている。5 棟の新館は車籠埔断層保存館、地震工程教育館（地震工学）、映像館、防災教育館、重建（復興）記録館である。

断層保存は、館内参観の動線には屋外の断層と平行に断層の位置を示す地図と写真があり、これらとトレンチ断面は直行し断層を立体的にイメージする

ように配置されている。地震工程教育館は小さいブースに分けられ、パネルや模型が備えられ、簡単な小実験などを通じ耐震構造や地盤についての理解を深めるよう工夫されている。説明員が多くいるのも特徴である。映像館は、展示に加え、ドキュメンタリータッチで地震を疑似再現している。防災教育館は防災や地震後の救済を中心に、災後の救済体験施設などがあるほか、地震観測の歴史から台湾の自然と生物に至るまで展示している。展示館出口は「希望之廊」と名付けられた外側に水が流れるガラス張りのエレベータを利用し、暗闇の館内から「洗礼之塔」と呼ばれる明るい館外に出ることで復興をイメージさせるという工夫がなされている。重建記録館は各地域でどのように復興されたかという展示がなされ、模型や文献といった資料も展示している。その他にも教育区内には、壊れた水のないプールに 9, 2, 1 の大きな鉄製の噴水を配置する展示や、地震時の地震計の記録が橋の床に大きく刻んだ展示など多くのモニュメントが存在している。

この博物館は、二つの博物館計画が合併して成り立っている。最初の博物館計画は車籠埔断層保存館、地震工程教育館（地震工学）、映像館のみであった。その後、復興を記念する博物館計画を吸収して現在の姿となった。

博物館の建設には多くの障害があった。博物館の必要性は地震直後から議論されており、政府は、各地方自治体に対し、博物館建設候補地を提案するよう通達した。その選定基準としては、被災建物の現状と防災教育の価値、建物の安全性、面積、景観の多様性と気候、利便性、住民の協力、地球科学の学術的意義、周辺観光地との融合性、土地取得の難易度、周辺の人口などを考慮することが求められた。候補地には、10 地点が選ばれた。

最有力候補が、霧峰の光復新村であった。光復新村は、台湾省公務員の退職者が多く住む、閑静な地域として有名であった。地震断層はこの住宅街を横断し、住宅街にある小中学校の敷地を横断した。中学校は倒壊し、断層は運動場のトラックを 2m 変位させた。その景観は車籠埔断層による地変と被害の象徴的な場所として地震直後から注目を集め、多数の人が観光バスなどで見学に来た。住民がテント生活をする中を、観光客の乗る大型バスが多いときは 1 日 30~40 台にも訪れ、住民の不満が募っていた。博物館建設地の候補地点に選定されたものの、事前に住民に対する説明がなかったこと、小学校が使用可能であることなどを理由に住民は強く反発した。その後、学校移転問題を中心に何度も話し合いがもたれたが議論は平行線をたどった。最終的に、住民代表が訪日し、阪神地区の地震の記念公園の視察を

行い、その結果、博物館の重要性が認識された。その後住民の理解を得て、住民に対する計画段階で住民との意見交換を密にすること、移住者の今後 10 年間の宿賃の補償、小学校の存続などの様々な条件に折り合いが付き、2000 年 9 月に光復國中を震災記念園区とし 11 月に正式に光復中跡地に博物館を建設することが決定した。2001 年 2 月第一期工事として、断層現状保存、講堂展示館、教室、地震体験館、校舍観察路、庭園歩道が整備されることが決まった。2001 年の 2 周年には影像館が仮オープンし、断層保存館は 2004 年の 5 周年記念に開館した。この建物は 2004 年の台湾建築賞受賞を受賞した。

その後、2004 年 5 月には復興過程陳列、成果、地震及び防災体験室、921 に関する資料、マルチメディア室をテーマにした 921 陳列館を南部の南投県に建設する案が重建委員会に提出される。2007 年 8 周年に合わせて地震工程教育館とともに開館した。

このように震災直後は、断層の保存と地震の記録が主目的であり、教育的な断層保存館と影像館が設立された。地震 5 年後に計画された陳列館案では復興と再生に主眼が置かれた。特筆すべきは、当初の目的である復興と再生の他に例えば台湾の自然と環境問題といった台湾共同体としての展示が増えている点である。ここからは、台湾社会の一体感や再構築が地震の記憶の保存の中で重要なテーマであったことがうかがえる。

(2) メディア報道

台湾での被災の記憶を伝える取り組みの一つにドキュメンタリー映画がある。「全景」というグループが地震直後から撮りためた 921 地震の映像記録が、2004 年にシリーズとして公開され、当時の台北市長・馬英九（現総統）や当時の総統・陳水扁も見に行く騒ぎになった。シリーズのうち『生命』は山形国際映画祭をはじめとして国際的ドキュメンタリー映画賞を受賞している。したがって台湾内の文脈のみでこうした映画の評価をするのは偏りがあるかもしれないが、地震によりこれまで関心も持たれなかった地域がスポットライトを浴び、そうした地域まで関心を払うことが、「台湾人としてあるべき心のもちよう」として台湾人に共有されていくきっかけとなったと考えられる。

また、921 地震当時は、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌によって報道が行われていた。政府報告書や学術報告書は多く出されているが、人々の記憶に関連する部分ではあまり大きな役割を果たしているとは思えない。逆によく見かけたのは地震に関連する写真集である。

5. インドネシア

5.1 調査概要

2006 年 5 月 27 日にインドネシアのジャワ島中部ジョグジャカルタ市の郊外を震源とするマグニチュード 6.3 (USGS による) の地震が発生した。この地震による被害はジョグジャカルタ特別州パントゥール県と中部ジャワ州クラテン県に集中した (Fig.3)。

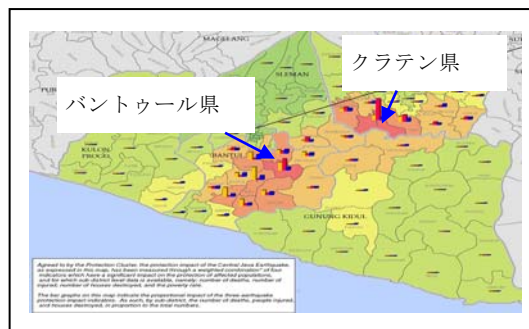


Fig. 3 Map of Indonesia (Source:UNOCHA)

地震による死者は 5,778 名であった。ジョグジャカルタ市北部には活火山のムラピ火山があり、地震発生直前に噴火活動を始めていた。ジョグジャカルタでは、火山による被害や小規模の火山性地震を繰り返し発生していた。この地域を最後に大地震が襲ったのは、1947 年のことであり、地震による死者は 213 人、倒壊家屋は 2,800 戸であった (Murwanto, 2007)。

Table 3 The List of Interviewees in Indonesia

	sex	age	brief information
I01	male	43	church man
I02	female	42	housewife
I03	male	36	Trader, have a shop
I04	female	30	have a small shop
I05	male	45	village leader
I06	female	38	housewife
I07	male	32	small fabrique
I08	female	42	kindergarden teacher
I09	female	35	small shop
I10	male	50	retired
I11	female	40	small shop
I12	male	36	staff of CBR center
I13	female	25	housewife

(Source: Sakamoto, M.,)

現地調査は、地震による人的・物的被害が大きかった、ジャワ島中部に位置する中部ジャワ州ガンティワルノ県とジョグジャカルタ特別州パントゥール県を中心に行った。この地域ではレンガ造りの屋根

が大きい伝統的家屋が多くあり、地震によりこれらの家屋が倒壊した。調査回答者は、男性が6名、女性が7名であった（Table 3）。

5.2 個人の記憶

(1) 地震発生時の記憶

調査回答者13名のうちジョギング中だった1名（I12）を除く12名が、地震発生時に自宅にいた。地震発生は午前5時54分と早朝ではあるものの、イスラム教の人が早朝の礼拝を終えた直後であり、女性の多くは調理中であった。「地震があった時は店から戻ったところだった。妻が料理をするための油を買いに行っていた。妻は台所で調理中だった。息子は姉の家にでかけていて、娘はテレビをみていた。揺れを感じて、娘をつかんで走って逃げた。そして、妻に走るようにと叫んだ」（I03）。「地震があったときは調理中だった。あわてて外に飛び出した」（I04）。

また、2名がトイレ兼浴室にいたと回答していたが、いずれも外に自力では脱出できなかった。「朝食を作り終えて、風呂に入っているところだった。二人の息子は台所で朝食を食べており、妹がその横でアイロンをかけていた。地震が起きた時に、走らなければ、と思ったけれど、服を探している間に家が崩れてきた」（I08）。「地震が起こったときには、トイレにいた。揺れが収まると、扉があかずに助けを求め叫んだ」（I05）。

また、住宅倒壊に巻き込まれた話が複数あった。「地震があった時、起き上がることができずに、戸棚の後ろの床の上でじっとしていた。揺れが収まったことから、走ろうとしたが、足が何かに挟まっており、体の上にはがれきがあり動けなかった」（I09）。「地震があった時は部屋の中にいて、家の外に走って逃げた。でも、祖父を助けなければと思い家に戻り、祖父のところにたどりつく前に家が崩れ落ちてきた。何が起ったのかよく分からなかった」（I11）。「地震発生時には家の中にいた。夫が職場から帰宅したところであった。夫が自宅に入った途端地震が起きた。夫が『地震だから、走れ。走って逃げろ』と叫び、その声を聞いて、家から走って逃げたが、娘が家にいることを思い出して家に戻った。娘を連れだそうとした。後のことは覚えていない」（I10）。

揺れが収まった後に「津波が来る」という噂が流れ逃げた人々は街は大パニックになっていた。「地震の後、人々は津波が来ると信じて大パニックになっていた」（I03, I04）。「地震の後、周りは津波パニックだった。自分は負傷していたので逃げられなかった」（I09, I10）。「携帯電話は使えずに、ラジオをさがした。『津波が来る』と皆が走り始めていた。そこで、妻にバイクを探してもらい走ろうとした。もう、バ

イクで走りだしている人もいた。津波が来ると信じ、たくさんの人がパニックになり、走った。走った。走った」（I12）。

(2) 避難生活の記憶

揺れが収まった後、親族の家に避難していた人もいたが（I03, I04）ほとんどの人は、自宅前や広場にテントを張り、そこで過ごした。「地震の後しばらく皆が自宅の前に集まり皆ですごした。互いに大丈夫だと語りあった。建物はほとんど壊れており、皆でそれぞれ家の中にあるものを持ち寄った」（I01）。「地震から3日後に物資が届き始めた。その時まで、支援が届くなどということは全く考えていなかった。ここは、かなり外れ（県境）にあるから。支援が来ても、きっと県境のここまで来るとは思わなかった。途中で盗まれる可能性もあるし」（I01）。

仮設住宅としては、竹で作られた住宅が一般的であった。「赤十字が来て、竹の家を作ってくれた。その家に2006年まで生活した」（I03）「国際移住機関（International Organization for Migration, IOM）が竹でできた家をくれた。でも、7家族が一部屋で過ごさなければならなかったから、テントに移った」（I13）。

(3) 復興の記憶

復興については、基本的に支援の分配に関する話を中心であった。多くの人は支援の内容よりも、その分配に対し不満を抱えていた。「災害のあと、この地区の人々は被災者支援調整のための事務所（POSKO）を設置し、救助チームや治安確保チームを作った。NGOや政府による支援が来た。中でも、住宅建設支援を行ったIOMがたくさんのデータを集めたから、多くの人が、援助が来るものと期待していたから、問題があった。POSKOは支援受け入れに関するあらゆる決断ができたから、多くの腐敗がPOSKOで生じていて、誰もそれをコントロールできなかった」（I03）。「地震から半年後くらいに、村の人々は政府から住宅再建を得たけれども、自分のところには来なかった。多分、自分は教会の司祭だから、教会から何か支援を得ているとみんな思っていたのだろう。実際は何ももらえなかったのに。この地域の人々はみな新しい家を手に入れて幸せである。」（I01）。「皆は住宅支援を得ていたが、自分は支援を得られなかった。おそらく妻の看病に病院に行っていたからではないかと思う」（I10）。

(4) 災害の記憶

災害は今も人々の心に様々な後遺症を残していた。「色々な後遺症を感じる。特に、音に敏感になって

いる」(I02, I04)。「被災経験を忘れようと努力している」という人もいた (I03, I04)。

宗教と被災経験を重ねて捉えている人もいた。「災害は神の警告だと思う。皆『災害は、神が、彼の教えを無視しているからこの村に起こった』と言っている。だけど、自分は、神の警告だと思っている。経験はすべて神の心の下にある」(I03)。

被災の記憶を伝えるものは、特に作られていない。「新しく建てられた家を見ると災害を思い出すので、それで十分」(I01, I12)。

(5) 記念式典などへの参加

記念式典などに参加するという話も特に聞かれなかった。「地震の翌年の同じ日、2007年5月27日には、人々は寝ずに皆で起きて過ごした。もう一度地震が来るかもしれないと思ったからだ」(I01)。

また、次節で述べるが、地震の記憶をとどめておくために、行われている取り組みとしては、「ワヤン・クリッ (Wayan Kulit)」というジャワ島で伝統的に行われている影絵芝居が行われていた。「村は、ワヤンで記憶を残そうとしている」(I03, I05)。「ワヤンを自分は見ていないが、見に行った友人は、物語の最後にダラン (dalang, 人形遣い) が、地震の話をしていたと話していた」(I04)。

この他、ジャワ古来の祭事に関する語りもあった「ジャワ・イスラムを信じている村の高齢者は、地震が起こらないために様々な祭事をおこなっている。この村を作った父に祈りをささげるために、特別な墓地で、祈りと農作物を捧げている。この村を作った父に、安全と、豊穰と、幸せを祈っているのだ。我々の世代とは考え方が異なる」(I05)。

5.3 集合的記憶

インタビューにおいては、災害の記憶を伝えるものとして、ジャワに伝統的な人形を用いた影絵芝居「ワヤン・クリッ」が上演されたという語りが複数みられた。ワヤン・クリッは、ジャワの伝統的な文化行事であり、人形遣いであるダランが一人でスクリーンの裏で水牛の皮で作られた人形を動かし、その影を投影し、物語を語るものである。ダランの語りとともに、インドネシアの伝統的な楽器を演奏する楽団によりガムラン(gamelan)が演奏され場を盛り上げる。

この上演を企画した、サバグウォ (Sabagwo) 村長、そしてダランから上演の経緯、当日の様子を聞いた。

「ワヤン・クリッは、上演にお金がかかる高価な行事であることから、祭事などにおいて上演される。災害から2年を迎えた時に、人々を楽しませ、それとともに災害の教訓を伝えるために企画した。上演

作品は、ダランと相談し『アルジュノ・サスラバフの誕生 (Arjuna Sasrabahu)』にした。これは、再生をテーマとした作品であることから、地震後の地域の再生を語るにはふさわしいと考えた。登場人物は、村の人の名前を使い、また、幕間の道化が出てくるシーンでは、地震に関する教訓を述べた。意図した教訓は、我々は大いなる自然の中で生活しており、その中に人間が作った世界があること、そして、災害は神の人々の親切心に対する警告であるという二点である」。

ワヤンの上演は、夜9時から早朝5時30分まで行われ、約500名が観にきた。今後も、どこからか予算が得られるのであれば続けたいとのことであった。

6. 考察

本調査を通じて明らかになった個人の記憶の語られ方の傾向と記憶保存活動の相違を Table 4 に示す。

Table 4 Tendency of Memory (Turkey, Taiwan and Indonesia)

		Turkey	Taiwan	Indonesia
Name of Hazard		Kocaeli EQ	Chi-chi EQ	Central Java EQ
Date of impact		1999.8.17	1999.9.21	2006.5.27
Damage		Death toll: 17,000	Death Toll: 2,400	Death toll: 5,800
Research Area		Gölcük (Kocaeli)	Nantou, Taichung	Yogyakarta
Num. of Interviewee		25 (M19, F 6)	31(M23, F8)	13(M6, F7)
personal memory	Memory of impact	Clear	Vague	Clear
	M.of evacuation	Vague	Clear	Clear
	M.of recovery	Vague	Clear	Vague
	Other memories related with the disaster	precursor, building safety	Ethnic movement, local voluntary team	Tsunami Panic, ritual events
	Talk to each other	yes	except for victims	No
	Earthquake is	Human errors Not to be forgot	Bad memory To be forgot	Fatality, God's Trial
	Lessons	EQ-resistant	Magnitude of	Respect to religion
collective memory	Commemoration	+	+	-
	Monuments	Several	Many	No
	Museum	2	Many	No
	Other forms of memory	booklets, CDs (music and movie), gravestone	booklets, DVDs, gravestone	broken houses booklets, DVDs Wawayang (shadow)

(Source: Kimura,S., Matta, N., Matsuoka, T., Sakamoto, M.,)

トルコでは、人々は、震災直後の記憶を鮮明に語っていた。災害の原因として、「建物の悪さ」を挙げつつ、個々の被害に関しては「運命」として受け止めていた。

一方、集合的記憶は、博物館と震災記念行事に見られた。震災記念行事では、被災の記憶を「忘れない、忘れてはいけない」という言葉が繰り返し使わ

れていた。同様「忘れない」というメッセージは、博物館に書かれている「この地震で体験されたものを理解させ、思い出させる」という言葉からも伺える。

ただし、何を忘れないのかは実は曖昧である。博物館や記念式典においては地域（アダパザルやギョルジュクなど）を参照枠組にしようという意図が見て取れるが、しかしそこで収集される記憶や個々人の語りにはそうした傾向はあまり存在しない。その意味で、トルコの事例は、「地域の復興と防災」という枠組のなかに記憶を収めていこうという動きと、実際の多様で個別的な記憶の間に多少の緊張関係が見られ、現状においては個人の記憶の緩やかな集合体として記憶が維持されているといえる。

一方で、台湾では、個人の被災経験は「悪い」記憶として忌避されており、インタビュー回答者の中には、被災時の記憶を語ろうとしない人がいた。また、災害後の生活や復興に関する話がよく聞かれた。なかには、日月潭のサオ族のように、復興過程において形成された人脈が、後の民族運動の方向性・資金確保・運営形態・参加者を決める、あるいは、タイヤル族の村のように、民族文化復興のために作られた村内の組織が地震当時の救難隊結成につながり、さらにそれが以後の災害救助や現在まで続くコミュニティ活動にまでつながるといような復興後の変化を表す事例が確認された。

集合的記憶としては、地震を機に複数の博物館が設置されていた。展示は、いずれの博物館においても、自然外力の威力を伝える展示、即ち、活断層や地震遺物が主流であり、個人の記憶を伝える展示はほとんどみられなかった。地震 8 年後に新たに開館した陳列館案では、復興と再生という展示に主眼が置かれていた。つまり、意図的に災害からの復興と意味づけられた記憶を創出することにより、台湾社会の一体感や再構築を図ろうとしていると考えられる。

インドネシアにおいては、多くの人々が被災時の記憶を語っていたものの、被災の記憶を集合的記憶として継承しようとする試みは見られなかった。唯一、ワヤン・クリッという影絵芝居が行われていたが、これが継承されるのかは不明である。ジョグジャカルタでは、1947 年にも人的被害を出す地震がみられたが、このような過去の被災経験も蓄積されていない。

これらの被災の記憶の現れ方を示したのが Fig.5 である。被災の記憶はおそらく個人レベルにおいては程度の差はあるにせよ維持されているであろうが、その集合的記憶としての現れ方は、①トルコのように、緩やかな複数の個人の記憶の集合、即ち集合的

記憶として維持しようとしている地域と、②台湾のように、個人の記憶の集合ではなく、復興政策の一環として新たな社会的記憶の形成に努めている地域と、③インドネシアのように、集合的記憶を形成しようとしていない地域があることが明らかになった (Fig. 4)。

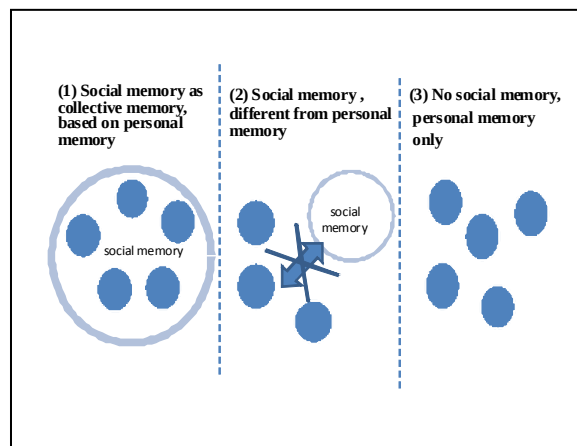


Fig.4 Relation between Personal Memory and Social Memory (Source: Sakamoto, M.)

ただし、どのようなメカニズムが作用し、個人の記憶が集合的記憶を形成するのかという点については、本研究からは明らかにならず、今後の課題としたい。

7. おわりに

本研究では、大きな地震災害から数年以上が経過したトルコ、台湾、インドネシアという異なる地域において、被災者個人が被災経験に関する記憶の何を語るのか、また、個人の記憶の集合としての集合的記憶が形成されているのか、形成されている場合は、どのようにその記憶は社会において意味づけられているのかを現地調査に基づき把握し、結果を比較検討した。その結果、明かになった点は以下の通りである。

第一に、個人の記憶の語りについては、トルコとインドネシアでは、被災当時の記憶が鮮明に語られたが、台湾では、復興に関する語りがよく聞かれるというような傾向が確認された。

第二に、個人の記憶の集合的記憶としての現れ方には①緩く複数の個人の記憶の集合、即ち集合的記憶を維持しようとしている地域と、②個人の記憶の集合ではなく、復興政策の一環として新たな社会的記憶の形成に努めている地域と、③集合的記憶を形成しようとしていない地域がある、ということが明らかになった。

第三に、トルコと台湾においては、博物館が、集合的記憶継承の「場」として活用されていた。博物館では、記憶を「復興」と関連付ける展示が見られた。これらの博物館は建設に先駆け、日本の災害博物館の調査を行っていることから、何らかの形で日本の影響を受けていると考えられる。

ただし、個人の記憶がどのようなメカニズムを経て、集合的記憶を形成しているのかという点については課題が残った。そこで、今後は、記憶継承の「場」としての博物館に着目し、その「場」における個人の記憶と集合的記憶の結びつきを明らかにしたい。

謝 辞

本研究にかかわる調査は、京都大学グローバルCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の「次世代研究イニシアティブ研究助成」を受けて行われた。ここに、感謝の意を表す。

補 注

[1]いずれも記憶をさす *anı* と *hatır* という語を語幹にもっている。両者の派生語を見ると、前者については記念碑 (*anıt*)、記念式典 (*anım töreni*) などがあり、後者は思い出の品 (*hatıra*) などがある。*Hatırlamak* が思い出すという意味になるのに対し、*anlamak* は理解する、気づくという意味に

なる。入口に書かれた *anlatmak*, *hatırlatmak* は、この二つの動詞にさらに *t* をつけて使役の形にしたものである。

参考文献

- 阿部安成，小関隆，見市雅俊，光永雅明，森村敏己（編）（1999）：記憶のかたち，コメモレイションの文化史，柏書房。
- 石田雄（2000）：記憶と忘却の政治学，同化政策，戦争責任，集合的記憶，明石書店。
- ポール・トンプソン著，酒井順子訳（2002）：記憶から歴史へ，オーラル・ヒストリーの世界，青木書店。
- 木村周平（2006）：回帰する『8月17日』，トルコにおける地震の集合的記憶をめぐって，『文化人類学研究』7，pp.156-170。
- 松多信尚，西川由香：台湾921集集地震を引き起こした活断層の保存とその経緯，国立歴史民族博物館研究報告（投稿中）。
- 溝上智恵子（2003）：ミュージアムの政治学，カナダの多元文化主義と国民文化，東海大学出版会。
- Murwanto, H., ed., al (2007): Fenomena Geologi Akibat Gempa Tektonik 27 Mei 2006, Journal of Kebencanaan Indonesia, Vol.1, No.2, Pusat Studi Benana, Universitas Gajah Mada, pp.47-63.

The Comparative Study of Earthquake Memory and Transference
-Case Studies of Turkey, Taiwan and Indonesia-

Mayumi SAKAMOTO, Shuhei KIMURA*, Nobuhisa MATTA**,
Tadasu MATSUOKA*** and Katsuya YAMORI

* The Center for South-East Asian Studies, Kyoto University, Japan

** Department of Geoscience, National Taiwan University, Taiwan

*** Department of Area Studies, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, Japan

Synopsis

The memories of past disaster experiences tend to fade out quickly. Survivors do not want to keep horrible memories, and try to forget it. Although the transference of lessons learnt through past disaster experiences is considered as one of ways to motivate people to take disaster preventive action, the mechanism of how the personal memory form collective memory and transfer to other generation/region is still not clear. In this study, we focus on the memory of earthquake disaster in different region, Turkey, Taiwan and Indonesia. Through field studies we try to find out what kind of memory do people talk as personal memory, and how those personal memory form collective memory and will be transferred.

Keywords: memory, collective memory, earthquake, natural disaster, museum